

第2章 上之国館跡の概要

第1節 上ノ国町の概況

1 位置と地形環境

上ノ国町は、北海道島の渡島半島の一翼をなす松前半島の西に位置し、日本海に面している。北は江差町・厚沢部町、東南は大千軒岳（標高1,071.6m）を主峰とする渡島山地の分水嶺をもって、木古内町・知内町・福島町・松前町に接する。総面積は547.57km²で、町土の92%が山地で占められ、平坦地はきわめて少ない。地形的には列島弧の中核をなす本州島の延長と考えられ、第四紀の那須火山帯の北端に位置している。

地勢は、上ノ国町の北部を西流し、町内随一の流域面積を誇る二級河川天の川流域を挟んで、北には八幡岳（664.6m）、笹山（611m）などが、東から南は大千軒岳を中心に木無山（871m）、黄金山（785.0m）大岳（775.6m）、七ツ岳（956.9m）など標高700m超の山々が連なる山岳地帯と、200～600m台の谷密度の大きい山地で占められており、全般的に壮年的な地形を呈している。

平野部は、中部を流下する準用河川大安在川流域、南部の二級河川石崎川流域にも広がるが、面積は狭小である。天の川左岸には放牧適地のなだらかな丘陵が発達している。

海岸線は約30kmにも及び、汀線に沿って狭小な海浜が延び、その背後に急峻な山地が迫まっているが、その間に海岸段丘が1～2段形成されているのが一般的な海岸地形である。

2 気候

本州島の西岸を北上した対馬海流が北海道島の西岸を北上する影響を受けるため、気候は北海道内では比較的温暖で、平均気温は10.3℃である。雨量は6月から11月にかけて多く、年間降水量は1,255mm前後である。

ヤマセ（東～南東の風）の出現率は年間30%を超え、春から秋にかけて卓越する。春先から夏にかけては、冷涼なヤマセが渡島山地の鞍部を越え、東から西に流下する川筋に沿って流れ込み、たびたび冷害をもたらす。また、冬期間は西からの季節風によって地吹雪が発生し、交通障害を引き起こすこともある。

年平均風速も強く、八幡野丘陵の風力発電施設では6.4m/sを観測し、10m/s以上の最大風速日数は年間140日を数える。また、曇天が多く日照時間は平均1421.5時間と短い。初霜は10月中旬、初雪は11月中旬で、12月中旬には根雪となる。山間部での積雪量は130cm、海岸部では40cmと比較的少ないが、3月中旬には融雪期を迎える。

3 地質

当地域は、地質学的にみれば東日本列島弧の延長にあたり、第三紀の特色ある緑色凝灰岩が発達するグリーンタフ地域（green tuff regions）に属している。

当地域の基盤をなすのが「松前層群」で、粘板岩、砂岩、チャート、ホルンフェルスなどの堆積岩類で構成され、「先第三系」と呼ばれる。

この基盤を不整合に覆って広い分布を示すのが、「福山層」と呼ばれる中新世最下部の地層で、主として安山岩～玄武岩質の溶岩、凝灰角礫岩、凝灰岩などの火砕岩からなる陸成層である。

当町の市街地周辺も、「松前層群」の上部を新第三紀中新世以降の地層が覆って、第四紀更新世の段丘堆積物が海岸沿いに平坦面を形成して分布するほか、完新世の氾濫源堆積物や海浜堆積物が天の川などの大小河川流域や海岸に分布している。なお、ランドマークとして周知の夷王山（標高159m）を構成するのは福山層の安山岩質凝灰岩と溶岩である。

4 土地利用の状況と現況植生

土地利用の状況は、町土の約77.8%を国有林（19,041ha）と道有林（23,632ha）が占め、一般民有林（6,329ha）も加えると、92%が森林（49,965ha）である。一般民有林の状況は、天然林（4,389ha）ではブナ、カエデ、ナラ類が多く、人工林（2,724ha）はスギ、トドマツ、カラマツが多く、10齢級（45年生）以上の標準伐期齢を過

ぎているものが41.8%に達している。

したがって、林野や湖沼を除いた可住地面積は4,000haほどで、そのうち耕作可能な農用地は1,050ha程度で総面積の2%弱にすぎない。

植物分布上からみると、本州島と北海道島の移行地帯に相当し、植物分布の境界線としての渡島半島黒松内低地帯以南の植生的特徴が顕著である。北海道島の植生を特徴づけるエゾマツ、アカエゾマツやハルニレなどよりも、青森県と秋田県の県境に位置する世界遺産の白神山地と同じ冷温帯落葉樹林の指標樹種であるブナが旺盛に茂っており、東北地方と同じ冷温帯落葉樹林帯に属している。

海岸の国道沿いなどにはオオイタドリやススキ、エゾニュウなどの群生も目立ち、独特な植生景観を醸し出している。

5 集落の変遷

元禄13年(1700)の『松前島郷帳』は「石崎村、はねさし村、汐吹村、扇石村、瀧澤村、木の子村、かみの國村、喜多村」と、海沿いに形成された漁村の名だけを記す。『天保郷帳』(天保5年(1834))も「小砂子村、石崎村、羽根指村、汐吹村、扇石村、木之子村、上之國村、北村」と記し、次に「大留村」と続けて「右枝村」として「トマップ村」と「早瀬村」を加える。大留村は上ノ国目名山の檜材流送の留場、トマップ村と早瀬村は上ノ国村の枝村で天の川沿いの農山村として発達した村である。

上ノ国村は、それら村々のなかでもっとも地位が高く、松前藩政期、福山城中における名主の席次は東西諸村の第一位に置かれていた。藩主一代一度の三社詣や毎年正月の藩主名代の参拝(代参)に象徴されるように藩政期を通じて松前家祖廟の地として厚遇されていた。

石崎村・木ノ子村・喜多村は家老職となりうる藩主一門の知行地で、上ノ国村をはじめそれ以外の村々は藩主直轄地であった。石崎村は松前藩二代藩主公廣の系譜に連なる斎藤流松前家、喜多村は初代藩主慶廣の六男景廣を祖とする河野流松前家の知行地である。のちに木ノ子村は家老・蠣崎将監廣年(波響)の一代限りの知行所となった。

それら村々の住人の出身地はよく分かっていないが、明治19年(1886)の『青江理事官諮問回答書』は、津軽、越前、南部などからの移住伝承、村々の草創を江戸時代の初め、もしくはそれを遡る年代と伝える。移住者たちは故国の生活習慣や食習、方言などを持ち込んだが、鯨などの漁撈に依存する和人地西在の経済がそれらを呑み込み、独特な文化的風土を形成していったようである。

廃藩置県後、北海道から弘前県(のちに青森県)に一時編入された経歴もあるが、明治13年(1880)には上ノ国七ヶ村(上ノ国村、北村、大留村、木ノ子村、汐吹村、石崎村、小砂子村)の行政組織の編成替えが行われ、北村・大留・上ノ国の三ヶ村、木ノ子・汐吹二ヶ村、石崎・小砂子二ヶ村に戸長役場が置かれ、同19年(1886)には上ノ国村外六ヶ村戸長役場に統合され、同35年には二級町村制の施行によって上ノ国村となり、昭和42年には町制が施行された。

6 交通と社会環境

道南の中核都市・函館市と江差町を繋ぐ国鉄江差線が全線開通したのは、戦前の昭和11年のことである。町内の駅の数も多く、現在も天の川流域の農村部や山間部に6つある。

国道228号は、江差町から海岸沿いを走って北村を通過して二級河川天の川を渡り、上ノ国市街地を経て、漁村集落を縫うように松前方面へ走り、道南の中核都市・函館市へと続く。道道江差木古内線(道道5号)は江差町からJR上ノ国駅の前を走って木古内町へと続き国道228号に接続する。函館市への所要時間は2時間を超え、交通アクセスは決して良いとはいえない。

【国勢調査人口の推移】

(単位：人)

年 度	S35年	S45年	S55年	S60年	H2年	H7年	H12年	H17年
0～14歳	5,967	3,383	2,260	1,844	1,398	1,183	1,030	865
15～64歳	8,079	6,160	5,609	5,576	5,029	4,616	4,395	3,664
65歳以上	628	732	934	1,102	1,320	1,493	1,726	1,888
総数	14,674	10,275	8,803	8,522	7,747	7,292	7,151	6,417

人口は、昭和35年の国勢調査で14,674人を数え、ピークを示したが、年々減り続け、平成17年には6,417人と最盛期の43.7%にまで減少した。

若年層は激減し、少子化による自然減と若年層の恒常的な流出が続いている。これに反して高齢者層は激増し、高齢者人口（65歳以上）は昭和35年の3倍、高齢化率は29.4%で長寿化による高齢社会が現実のものとなった。高齢化率が50%を超える限界集落は4集落を数え、地域生活共同体としての基礎的な条件の維持が困難な集落が増えている。

【産業別就業人口の推移】

年 度	S 35年	S 55年	S 60年	H 2 年	H 7 年	H12年	H17年
第一次産業	3,774	1,035	1,006	822	617	457	464
農 業	2,458	590	598	487	383	272	290
林 業	491	196	208	153	86	46	40
水産業	825	249	200	182	148	139	134
第二次産業	1,368	1,695	1,449	1,371	1,396	1,378	846
鋁 業	917	223	166	27	46	33	14
建設業	311	918	837	764	895	979	553
製造業	140	554	446	580	455	366	279
第三次産業	916	1,177	1,279	1,241	1,374	1,431	1,398
卸売・小売業	271	385	375	336	387	400	313
金融・保険・不動産業	11	45	54	47	56	54	50
運輸・通信業	233	122	112	114	109	105	72
電気・ガス業	6	8	5	6	8	12	3
サービス業	326	476	587	565	632	677	771
公 務	69	141	146	173	182	183	189
分類不能	1	1	1	0	1	1	2
就業者総数	6,059	3,908	3,735	3,434	3,388	3,267	2,710

産業別就業人口にも激しい変動がみられ、昭和35年に約6,000人を数えていた就業者総数は平成17年に2,710人と約44.5%の水準まで落ち込んでいる。これを産業分類別にみると、第一次産業が最盛期の約12%、第二次産業も近年まで地域経済を牽引してきた建設業が大幅減に転じたため約62%にまで落ち込む反面、第三次産業が約1.5倍と漸増傾向が続いている。

昭和56年の役場庁舎の移転をきっかけに公営住宅や公共施設、文化施設がJR上ノ国駅を中心とした大留・北村地区に集中するようになった。それに伴って宅地造成なども行われ、農山漁村集落からの転住も進み、水田地帯であったJR上ノ国駅周辺は、上ノ国町の中心部としての地位を獲得することになった。

加えて、国道と道道の交叉部周辺に近年駅前商店街が形成され、また江差町に向かう国道沿線の北村地区にも地元資本のスーパーが建ち、購買力の町外流出を抑止する効果を上げ、中心市街地形成に一定の役割を果たしている。